博士論文（要約）

中年期の高校教師における教職アイデンティティの危機と再構築

―1950～ 60 年代生まれの教師のライフストーリーの事例研究―

髙井良　健一

本研究は、中年期の高校教師における教職アイデンティティの危機と再構築の過程と構造を、1950 ～ 60 年代生まれの四名の教師のライフストーリーを用いた事例研究を通して、探究するものである。探究にあたって、次の三つの研究課題を設定した。

第一の課題は、教師のライフヒストリー研究、ライフストーリー研究の研究史をつまびらかにして、教師研究における意義と可能性を明らかにするとともに、ライフサイクル研究も加えた先行研究の方法論と諸概念を検討しながら、中年期の高校教師における教職アイデンティティの危機と再構築を叙述するための研究枠組みを析出することである。第二の課題は、この研究枠組みを用いて四名の中年期の高校教師のライフストーリーをライフヒストリーの事例研究として叙述するとともに、追跡調査として行ったこれらの教師たちの中年期の振り返りのライフストーリーを分析、叙述することにより、中年期の高校教師における教職アイデンティティの危機と再構築の過程を具体的に描写し、その固有性と多様性、さらには共通する過程と構造を明らかにすることである。第三の課題は、上記の二つの課題を踏まえて、四名の高校教師の中年期における教職アイデンティティの危機と再構築の過程とその構造を、教職アイデンティティの再構築、自分語りの変容、歴史的、社会的文脈の三つの側面から探究することにより、中年期の高校教師における教職アイデンティティの諸様相を心理的、社会的、歴史的視点からとらえ直すことである。これら三つの課題の探究は、本研究における第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部の叙述にそれぞれ対応している。

本研究におけるライフストーリーの語り手は、1950 年代半ばから 60 年代前半に生まれ、1980 年代に教職に就き、高校教師としてのキャリアを重ねている四名の男性教師である。いずれの教師に対しても、42 歳あるいは 43 歳のときにライフストーリー・インタビューを行ったのち、五年から十三年の間隔をおいて中年期の振り返りのインタビューを行っている。これらのライフストーリーをもとに、教師の自己アイデンティティと教師の集合的な文化が交叉して生み出される個人の教職アイデンティティに注目して、中年期における教職アイデンティティの危機と再構築の過程を叙述した。

第Ⅰ部の方法論では、教師のライフヒストリー研究ならびにライフストーリー研究の歴史と諸系譜について論じるとともに、ライフサイクル論がとらえてきた中年期の課題を検討することにより、高校教師の中年期のアイデンティティの諸様相をとらえるための研究枠組みを析出することを試みた。まず第一章と第二章では、欧米における教師のライフヒストリー研究の先行研究の動向と課題を論じ、ライフヒストリー法の教育研究における歴史とそこで議論されてきた諸論題を明らかにした。続いて第三章では、日本における教師

のライフヒストリー研究の動向を紹介したのち、社会科学において注目されつつあるライフストーリー研究の方法論について論じ、構築主義的なアプローチの可能性を示した。そして第四章では、本研究の主題である中年期の高校教師における教職アイデンティティの危機と再構築を叙述する研究枠組みを析出するために、教師のライフサイクル論ならびに生涯発達心理学における中年期についての先行研究の枠組みと課題を検討した。そこで時間意識の変容とジェネラティヴィティの受容、同僚性の再構築という中年期の教職アイデンティティの諸様相をとらえる三つの視点を析出し、これらの分析視点に基づいて教師のライフストーリーをライフヒストリーとして叙述、考察することによって、中年期の教職アイデンティティの危機と再構築の過程と構造を探究することとした。

第Ⅱ部の事例研究では、前半の四章において四名の教師の中年期にいたるまでのライフヒストリーを再構成し叙述したあと、後半の四章においてこれらの教師たちの中年期の振り返りのライフストーリーを叙述し分析した。まず第五章では、学校を移ることで中年期はじめの教職アイデンティティの危機を乗り越え、数学研究と生徒の自立の支援を両輪とした教職アイデンティティの再構築を経験している教師のライフヒストリーを叙述した。次に第六章では、同じく学校を移ることで中年期はじめの教職アイデンティティの危機を乗り越えたのち、地理研究を基盤とする教職アイデンティティを発展させている教師のライフヒストリーを叙述した。以上の二名の教師においては、中年期は生産的で創造的な時期として経験されていた。続いて第七章では、中年期において深刻な教職アイデンティティの危機に直面した教師のライフヒストリーを叙述した。この事例では、幾重にも重なるアイデンティティの危機が語られており、教職アイデンティティの再構築は大病というターニングポイントによって実現していた。最後に第八章では、同じく中年期において深刻な教職アイデンティティの危機に直面した教師のライフヒストリーを叙述した。この事例では、長期研修における新たな教職アイデンティティの模索が危機を生み出しているが、その危機をくぐり抜けることで、教職アイデンティティの再構築が実現している。以上の二名の教師においては顕著な中年期の教職アイデンティティの危機が生じており、その後、深い葛藤と再生を経て、教職アイデンティティの再構築が経験されていた。

続いて事例研究の後半に入り、第九章では、第五章の事例の振り返りのライフストーリーを分析した。この事例では中年期は「再適応と挑戦の物語」として語られている。この事例では、中年期は学校文化と自らのアイデンティティとの葛藤を内包しつつ、さまざまな挑戦を通して教職アイデンティティを再構築した時期として示されている。次に第十章

では、第六章の事例の振り返りのライフストーリーを分析した。この事例では生産的で創造的な中年期ののちに「遅れてきた中年期」が到来したという物語が語られている。この物語は中年期が重要な他者との関係によって立ち現れる時期であることを表している。続いて第十一章では、第七章の事例の振り返りのライフストーリーを分析した。この事例では「危機的な時期」として中年期が語られており、危機がそのピークに達した大病を契機として、他者との関係の組み替えを伴う教職アイデンティティの再構築が行われたことが示されている。ライフストーリーの語りの様式もまた他者を組み込むものに変容している。最後に第十二章では、第八章の事例の振り返りのライフストーリーを分析した。この事例では「危機的な時期」としての中年期とともに、「遅れてきた中年期」の物語が語られている。第十章の事例と同じく、世代間の教員採用の不均衡により下の世代が不在であったことが教師のライフサイクルに影響を与えていることが示唆されている。

第Ⅲ部の考察では、第Ⅰ部の方法論と第Ⅱ部の事例研究の議論を踏まえて、中年期の高校教師における教職アイデンティティの危機と再構築について、ライフサイクルならびにライフヒストリー、ライフストーリー、歴史の三つの視角から、考察を行った。まず第十三章では、先行研究における中年期をとらえる枠組みに、事例研究で叙述した教職生活の中年期の教職アイデンティティの危機と再構築の過程を重ね合わせて考察し、これらの研究の枠組みの再検討を行った。続いて、本研究で用いた教師の中年期における教職アイデンティティの再構築をとらえる三つの枠組みである時間意識の変容、ジェネラティヴィティの受容、同僚性の再構築という諸概念に、事例研究の叙述を重ねることで、これらの諸概念の関係と布置を明らかにした。次の第十四章では、四名の教師たちのライフストーリーをその語りの様式に注目することによって考察した。教師たちの中年期における教職アイデンティティの再構築は、ライフストーリーの自分語りのなかに表現されているが、その様式は固有性、多様性をもつとともに、共通性をもっている。ここでは教師たちのライフストーリーから、教師のアイデンティティの変容を支える教師の自分語りの三つの様式―もう一つの物語、未来のヴィジョン、今ここにある物語―を析出した。最後に第十五章では、四名の教師たちの中年期における教職アイデンティティの危機と、教師たちが教職生活を送ってきた時代の歴史的、社会的文脈の関係性について、歴史的に考察した。その結果、1980 年代以降の「選択」と「競争」を原理とする新自由主義による高校教育改革が、高校教師たちが育んできた「共生」と「協働」による普通教育の理念と厳しく対立し、そこから生じた葛藤が、高校教師たちの中年期における教職アイデンティティの危機に影 響

を与えていた可能性が示された。

以上の叙述と考察を踏まえて、終章では、中年期における教職アイデンティティの危機の過程と構造を、教師の自己アイデンティティと教師の集合的アイデンティティのねじれとしてとらえる仮説枠組みを提示した。その上で、中年期における教職アイデンティティの再構築は、教師の時間意識の変容から生み出されることを示し、その中年期のアイデンティティの再構築の過程には、教師個人の教職アイデンティティの変容とともに、学校文化、教師文化の編み直しの可能性が内包されていることを問題提起した。最後に今後の課題として、中年期の教師を対象としたより包括的な研究、女性教師を対象とした研究、教職アイデンティティの再構築に躓いた事例を対象とした研究、今回の事例を対象としたさらなる追跡調査の四つを挙げて、本研究を締めくくった。